

九大・六本松の人類学

清水, 展
関西大学 : 特別任用教授

<https://doi.org/10.15017/2338949>

出版情報 : 九州人類学会報. 30, pp.12-15, 2003-07-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

九大・六本松の人類学

清水 展
(九州大学)

九州大学六本松キャンパスには、かつて教養部がありました。私が赴任してきたのは1985年のことでした。筑波に移られた小野澤正喜さんの後任でした。初めて六本松を訪れたのは、その年の正月6日のことです。採用を決める最終面接を受けるために、当時留学中のアメリカから飛行機を2回乗り継ぎ、待ち合わせの時間を含めて、ほぼ丸一日かけてやって来ました。

キャンパスの最初の印象は、正直に言ってひどかったです。本館の建物の多少汚れた薄鼠の色合いといい、ただ長方形の箱といった形状といい、何の趣もない殺風景に落胆しました。しかも、真冬だったからでしょうが、正門ロータリーの3本の椰子の高木が、弱弱しく葉を垂らしてました。その様子が寒々しくて寂しそうで、見ている自分も哀しい気分になりました。面接では、論文の内容をめぐって、口頭試問のような質疑応答を2時間ほど課せられました。ここで落とされてなるものかと、寝不足のぼけた頭のまま、必死で受け応えをしました。それが終わって、近くの第一楼という中華料理店で開かれた懇親会では、面接までこぎつけたが、教授会で認められなかったケースが最近ありました、まだ安心はできません、などと釘をさされました。何から何まで、キャンパス全体が私に冷たいという感じでした。

しかし、今にして振り返れば、第一印象が悪くて、最初の期待値が低かったことが、逆に良かったと思います。4月に赴任したとき、まず、国体道路にそって植えられた桜の並木が満開で、感嘆と嬉しさのあまり、おおっー、と思わず声をあげました。教養部の組織も、とりわけ私が所属した社会科学部研究科は、若い教員も遠慮せずに勝手なことを言えるような、自由で少々アナキーで、しかも暖かくてのんびりした、とても居心地の良い雰囲気でした。

教養部での仕事は、1、2年生を相手に、週1回の講義で1学期ごとに完結する文化人類学科目を、週に4コマ教えるというものでした。同じ内容の講義を、異なるクラスを対象に週に4回繰り返すのはちょっと辛いです。3回目でも4回目でも常に新鮮な気持ちで繰り返すために、それなりに気合を入れなおして教室に向かうように努力しました。また講義のテーマも、アメリカの文化人類学、イギリスの社会人類学、フィリピンの文化と社会、あるいはアジア諸社会の比較など、幾つか異なるメニューを用意して、毎学期、気分を変えました。

学生たちは興味をもって熱心に聴講してくれました。どの学期でも、面白いと言ってくれる者、質問に来る者、箱崎でも文化人類学を勉強したいと相談に来る者などがいて、励まされました。また、試験をする

と、私自身が考えていた模範解答よりも、ずっと手際よく的確にまとめて論ずる解答が必ず何枚かありました。優秀な学生だなあと感心するとともに、一所懸命に話したことの手ごたえを感じてうれしく、また来学期も頑張ろうという気持ちになりました。

けれども教養部の授業が、1～2年生を相手に、文化人類学の入門編・基礎編を繰り返すだけなので、少々物足りない気持ちがありました。教育と研究がまったく切り離されていたからです。文化人類学の本や論文について話をする相手がいませんでした。その頃、箱崎の教育学部で九人研の研究会が定期的開催されていました。民族学会に認められ活動助成を受けているからなのか、六本松キャンパスの自由闊達な雰囲気すぐに慣れてしまったからなのか、その研究会の参加者が礼儀正しいことすら逆に公的で形式的で重々しくて、どこか馴染みがたい違和感を覚えました。

赴任して早々の頃だったように記憶してありますが、福岡大学の浜本満さんから一緒に読書会をしませんか、とのお誘いを受けました。文化人類学の本を読み、感想と批評を自由に言い合えるような勉強会を始めましょうという趣旨でした。読書会とか勉強会とかいう言葉が、自分もまた学生気分に戻ったような気分をもたらす新鮮な響きでした。浜本さんの目的は、学生・院生のための教育ではなく、教師や学生の区別なく、皆が同じ本を読んで、あれこれ勝手なことを言いましょ、それを通して互いに刺激し合いましょ、というものでした。

1985年に始めた時のメンバーは、浜本・清水のほかは、原尻、慶田、小鳥居、平松ら箱崎の院生でした。ほぼ毎月1回、六本松の学生会館の小部屋に集まり、2～3時間の議論をしました。六本松が一般教養のキャンパスでしたのでゼミ用の小教室がほ

とんどなく、学生の課外活動のための施設を使わせてもらったわけです。議論が終わると、キャンパスの外の居酒屋や中華料理店に出かけて飲んだり食べたりしました。時には波平先生が参加されることもあり、お宅にお招きされて集まったこともありました。

読書会といっても、会則や会費があるわけではなく、誰でも出入り自由、条件は課題図書を読んできてくれることだけでした。だから2、3度参加して姿を見せない者もいれば、何年か継続的に参加する者もいました。学部生で参加した者もいました。発足以来、現在まで続いているメンバーは、浜本、慶田、それに清水の3人です。

議論をして互いに刺激といっても、ほとんどの場合、途中で浜本さんが論点を整理して問題点を示し、話の展開をリードしてくれました。たとえば、読書会を始めて間もない頃、ペイトソンの『ナヴェン』(1936)[1958]を読んだときのことです。ペイトソンが説明できないまま指摘していた矛盾を、浜本さんが明快に説明してくれました。ペイトソン自身が詳細に報告している資料から、彼は、親族呼称(カテゴリー)の図と母系出自の場合の父方交差イトコ婚の図を再構成して、一見矛盾する事柄を統合的に解釈できる親族関係原理を導きだしたのです。説明を聞いて、その明晰さに驚嘆したことを覚えています。そんなスリリングな読解を楽しみながら、今までに何十冊という英語の民族誌を読んできました。

1988年に浜本さんが公団住宅から南区太平寺に家を建てて引越されてからは、読書会も彼の家で行うようになりました。土曜日の午後集まり、そのときの課題図書めぐって3時間ほど議論をした後には、まり子さんが用意してくれた夕食となり、食後には軽く飲みながら話を続けました。話がはずむと、しばしば夜の11時12時に至り

ました。その頃の熱心な参加者であった小田君は、浜本宅への皆の交通の便に役立つようにと、わざわざ買い替えのときに日産プレーリーという8人くらいが乗れる車を買って、読書会の後のメンバーを毎回家まで送ってくれました。

浜本宅に会場を移す以前から、子育てから少し余裕ができたまり子さんも、時々読書会に参加するようになっていました。会場が浜本宅に移ってからは、彼女が読書会の中心になりました。明るい人柄で皆が楽しくなる雰囲気を作ってくれること以外に、理詰め満さんの議論が時に抽象度が高くなり過ぎたりしたとき、個別具体的な問題へと立ち返って、そこから満さんへの疑義を呈し、別の立論の可能性を指摘するのはしばしば彼女でした。

また、まり子さんのほか、1989年には古谷嘉章さんが六本松に社会学担当の教員として赴任し、読書会の主要なメンバーとなりました。その頃、教養部を学部（仮称・教養学部）へと再編改組する計画があり、国際関係・異文化理解のスタッフを強化してゆこうという方針に合致する人材として、古谷さんが迎えられたのです。しかし、その後学部構想は頓挫し、代わって独立専攻大学院の設置へと方向転換されました。紆余曲折があり、結局、1994年に教養部は解体され、その半数ほどのスタッフを中心に大学院比較社会文化研究科が設立されました。残りのスタッフは、箱崎の各部局に分属となりました。

大学院の設置にともない、国際社会文化専攻・アジア社会講座の補強のために、当時沖縄で精力的に調査研究を進められていた太田好信さんが着任されました。六本松の人類学スタッフは3人となり、人類学の研究教育体制が拡充されたわけですが、残念ながら大学院のコースや講義名に文化人類学という名前は冠せられませんでした。

学際的な研究教育を進めるという理念のもとで大講座制が採られ、太田と清水がアジア社会講座、古谷が欧米社会講座に所属し、それぞれの講座名にちなんだ講義名が用いられています。正式な組織や制度として、文化人類学というコースが立てられているわけではありません。けれども人類学への思い入れと、研究や教育に対する熱意は他に負けないくらい強いものがあります。実際にも3人が連携、調整して文化人類学研究・教育を体系的に行えるようにゼミ・カリキュラムを組んでいます。

太田さんは、ノースウェスタン大学大学院で浜本さんのクラスメートであり、それ以来の友人なので、もちろん読書会の強力メンバーとなりました。ただし1991年に浜本さんが一橋大学へ移られたことを契機に、読書会は、それまでの月にほぼ1回という頻度から、春夏秋冬の休みのたびに1度、年に4～5回というペースに変わっていました。浜本さんが、東京からご家族のもとに戻られるのに合わせて集まり、まず課題図書をめぐる熱く議論をし（ビールを美味しく飲むために？）、続いて夏には庭でバーベキュー、冬には鍋を囲んで歓談するというスタイルは変わらずに続きました。

そうした歓談の際に、教育のための貢献として、人類学の知識や考え方を一般の学生にも分かりやすく伝えるために教科書を作ろうという話となりました。浜本満・まり子（編）『人類学のコモンセンス：文化人類学入門』（学術図書出版 1994）は、その成果のひとつです。あるいは、今年1月に出版されたジェイムズ・クリフォード『文化の窮状—20世紀の民族誌・文学・芸術—』（人文書院 2003 [1988]）も、読書会の後の食事の席で翻訳の合意が得られました。というよりも、訳者あとがきに記されているように、浜本まり子さんの説得によってメンバーが分担して翻訳に取り掛かるように

なった次第です。哀しく残念なことに浜本まり子さんは、一昨年11月に急逝されました。

彼女への感謝の気持ちと喪失の痛みを共有しながら、現在、読書会のメンバーは、彼女の説得によって始まった新しい教科書『人類学メイキング』（世界思想社）の出版の準備を進めています。しかし、彼女が病に倒れて以来、読書会が開かれることはありません。浜本さんが一橋大学に移られ、慶田さんが九州共立大学から熊本大学へ移られ、小田さんが一橋大学の博士課程から気鋭の芸術家になられ、その他の多くのメンバーが集まったり、離れたたりしながら読書会を続けてこられたのは、まり子さんの吸引力の賜物であったとあらためて実感しています。

読書会と同じように、教養部から大学院比文へと続いてきた六本松における人類学

の研究や教育が、このまま変わらずに続いてゆくということはないでしょう。来年の法人化と数年後のキャンパス移転を控え、比文の解体もありえるでしょう。箱崎の部局の全体を含めた再編のなかで、人類学や社会学の大合同があるかもしれません。この先、どのような展開があり、どのような未来が開けてゆくのか、逆に閉ざされてゆくのか不安です。

ただ確かなことは、文化の脱領域化と同様に、六本松や浜本邸という場所と結びついた私たちの人類学も、場所を越えた新しい結びつきによって作りなおしてゆかなければならないということでしょう。新たなネットワークのなかに六本松の人類学の志が流伝し転生してゆくことを願い、また確信しつつ、ささやかな思い出の記の筆を置くこととします。